

CHAPTER 1.

Loomings.

Call me Ishmael.

Some years ago—never mind how long precisely—having little or no money in my purse, and nothing particular to interest me on shore, I thought I would sail about a little and see the watery part of the world.

It is a way I have of driving off the spleen and regulating the circulation.

Whenever I find myself growing grim about the mouth; whenever it is a damp, drizzly November in my soul; whenever I find myself involuntarily pausing before coffin warehouses, and bringing up the rear of every funeral I meet; and especially whenever my hypos get such an upper hand of me, that it requires a strong moral principle to prevent me from

第1章

の  
ぼんやりと見えてくるも

イシュメール、これをお  
れの名としておこう。  
何年か前のこと——正確

にいつのことなのかはこの  
際気にしないでいたきた  
い——我が財布の中身は底  
をついて、加えて我が心を  
ひきつけるものはもうこの  
地上には何も無いというこ  
とになった。海に行こう、  
そうだ、少しばかり船に乗っ  
て世界の海を見に行こう、  
そう思い立ったのはそんな  
ときだった。

だ。  
口のあたりに不機嫌がつ  
のり、冷えびえとした十一  
月の雨が心のなかに降りし  
きるとき、また、街の棺桶  
屋のまえを通り過ぎようと  
して、我知らず脚が止まる  
とき、あるいはときにその  
まま葬儀がはじまり、葬送  
の行列がゆつくりとうごき  
だすにつれ、きまつて葬列  
の最後にとりついてとぼと  
ぼと歩きはじめると、ぼと  
と気づくとき、そしてその

心の奥の憂鬱を払い、血  
のめぐりをととのえるため  
におれがいつも使う術(て)

deliberately stepping into the street, and methodically knocking people's hats off—then, I account it high time to get to sea as soon as I can. This is my substitute for pistol and ball.

With a philosophical flourish Cato throws himself upon his sword; I quietly take to the ship.

There is nothing surprising in this.

If they but knew it, almost all men in their degree, some time or other, cherish very nearly the same feelings towards the ocean with me.

There now is your insular city of the Manhattoes, belted round by wharves as Indian isles by coral reefs—commerce surrounds it with her surf.

Right and left, the streets take you waterward.

Its extreme downtown is the battery, where that noble mole is washed by waves, and cooled by breezes, which a few hours previous were out of sight of land. Look at the crowds of water-gazers there.

Circumambulate the city of a dreamy Sabbath afternoon.

Go from Corlears Hook to Coenties Slip, and from thence, by Whitehall, northward.

What do you see?—Posted like silent sentinels all around the town, stand thousands upon thousands of mortal men fixed in ocean reveries.

Some leaning against the spiles; some seated upon the pier-heads; some looking over the bulwarks of ships from China; some high aloft in the rigging, as if striving to get a still better seaward peep.

努力もむなしくなつて、人の頭に乗っている帽子はすべて巧みに叩き落とされねばならぬとの思いに深くとらわれ、そつと街へさまよい出たはその狙いを定めるとき、そんなとき、そんなときこそは、すみやかに海に行かねばならない。それがおれにとつての拳銃と実弾のかわりなのだ。

上へ身を投げつけた。おれはしずかに無言で海に行く。格別驚くには当たらずとどろろ。海を知りさえすれば、人は程度の差はあれいつかは海に対して似たような感情を抱くようになるはずなのだ。たとえばマンハトーン人たちの島のうえに抜がるこの街(XXXX)。これはインドの島々が珊瑚礁に取りかこ

まれてるように、周囲を波止場に取りかこまれている街だ。波打ちぎわには交易の波が打ち寄せている。道は、右へ行つても左に出ても、水辺へと通ずる。下つて南端にいたれば砲台があり、波は壮麗な防波堤を洗う。風は、眼路を離れることはるかな彼方から、たつぷりと時間をかけて吹き渡つてくる。そして涼しげに吹き抜けて行く。ほら、

あそこに見えてくるもの、あれは、水辺でじつと水を見つめているものたちの群れではないか。このまま街をさらに一巡りしてみよう。いまは日曜、安息日の昼下がりに、街は夢にまどろむときだ。コーリアズ・フックからコエンティズ街へ抜け(XXXX)、そこからホワイトホルルの通りに沿つて北上する。

何が見えてくる？ それは何千の人、いや数千、数万の人がじつと海を見つめて物思いにふけている姿だ。まるで無言の歩哨が街をとりかこんで立ちつくしている図だ。水辺に突きでた杭にもたれかかっている人、棧橋の突端に腰を下ろしている人、中田帰りの船の舷側越しに身を乗り出している人、そんな人々もいれば、高くマ

## 第1章

ぼんやりと見えてくるもの

イシュメール、これをおれの名としておこう。

何年か前のこと——正確にいつのことなのかはこの際気にしないでいただきたい——我が財布の中身は底をついて、加えて我が心をひきつけるものはもうこの地上には何もないということになった。海に行こう、そうだ、少しばかり船に乗って世界の海を見に行こう、そう思い立ったのはそんなときだった。

心の奥の憂鬱を払い、血のめぐりをととのえるためにおれがいつも使う術（て）だ。

口のあたりに不機嫌がつのも、冷えびえとした十一月の雨が心のなかに降りしきるとき、また、街の棺桶屋のまえを通り過ぎようとして、我知らず脚が止まるとき、あるいはときにそのまま葬儀がはじまり、葬送の行列がゆっくりとうごきだすにつれ、きまって葬列の最後にとりついてとぼとぼと歩きはじめる人がいると気づくとき、そしてその人が自分自身であると気づくとき、さらには、憂鬱が嵩じる余り、ついに自己抑制の心の努力もむなしくなって、人の頭に乗っている帽子はすべて巧みに叩き落とされねばならぬとの思いに深くとらわれ、そっと街へさまよい出て

はその狙いを定めるとき、そんなとき、そんなときこそは、すみやかに海に行かねばならない。それがおれにとっての拳銃と実弾のかわりなのだ。

カトー (xxxx) は哲学的言辞を朗々と唱えながら剣の上へ身を投げつけた。おれはしずかに無言で海に行く。

格別驚くには当たらぬことだろう。

海を知りさえすれば、人は程度の差はあれいつかは海に対して似たような感情を抱くようになるはずなのだ。

たとえばマンハットー人たちの島のうえに拡がるこの街 (xxxx)。これはインドの島々が珊瑚礁に取りかこまれているように、周囲を波止場に取りかこまれている街だ。波打ちぎわには交易の波が打ち寄せている。

道は、右へ行っても左に出ても、水辺へと通ずる。

下って南端にいたれば砲台があり、波は壮麗な防波堤を洗う。風は、眼路を離れることはるかな彼方から、たっぷりと時間をかけて吹き渡ってくる。そして涼しげに吹き抜けて行く。ほら、あそこに見えてくるもの、あれは、水辺でじっと水を見つめているものたちの群れではないか。

このまま街をさらに一巡りしてみよう。いまは日曜、安息日の昼下がり、街は夢にまどろむときだ。

コーリアズ・フックからコエンティズ街へ抜け